

## 第二章 大乘仏教の世界観

このような世界観は、西洋由来の唯物論や心身二元論などとは大きくかけ離れたものである。しかしながら、東洋の伝統的な思想や哲学、特に大乘仏教の思想とは類似するものである。次に記す仏教經典の「華嚴經」<sup>けごんぎょう</sup>、および道元禪師の「正法眼蔵」<sup>しょうぼうがんぞう</sup>からの引用文は、本書の統合場のモデルと基本的には同じ世界観を表現しているように思う。

### 二章一節 華嚴經

華嚴經は大乘仏教の主要經典の一つである。四世紀頃までにはその全体が編纂され、インド、中央アジア、中国、日本、朝鮮半島に普及し、各地域の文化、社会、宗教、政治などに多大な影響を及ぼした。日本においては、奈良時代に聖武天皇の発願によって、華嚴經のシンボルである毘盧遮那仏の大仏像が東大寺に建立された。現在においても、奈良の東大寺は華嚴宗の大本山である。

この華嚴經には、唯心、縁起、如来蔵、空<sup>くう</sup>などといった数々の大乘仏教の思想が盛り込まれているが、その中の「唯心思想」は、本書の提示する統合場のモデルと基本的には同じ構造を示している。次に記す華嚴經の「夜摩天宮菩薩説偈品 第十六」<sup>やまてんぐうぼさつせつげほん</sup>の中の短い詩文は、その唯心思想を端的に表したものとして特に有名である。

譬<sup>たと</sup>えば、工<sup>たく</sup>みなる画師<sup>がし</sup>の、諸<sup>もろもろ</sup>の彩色<sup>さいしき</sup>を分布<sup>ぶんぷ</sup>するが如<sup>ごと</sup>し。虚妄<sup>こもやう</sup>に異色<sup>いしき</sup>を取<sup>と</sup>るも四大<sup>しだい</sup>（注：地、水、火、風の四要素）に差別<sup>しゃべつな</sup>無し。

四大<sup>しだい</sup>は彩色<sup>さいしき</sup>に非<sup>あらず</sup>ず、彩色<sup>さいしき</sup>は四大<sup>しだい</sup>に非<sup>あらず</sup>ず、四大<sup>しだい</sup>の体<sup>たい</sup>を離<sup>はな</sup>れて、別<sup>べつ</sup>に彩色<sup>さいしき</sup>有<sup>あ</sup>るにあら<sup>ず</sup>ず。

心<sup>こころ</sup>は彩画<sup>さいが</sup>の色<sup>しき</sup>に非<sup>あらず</sup>ず、彩画<sup>さいが</sup>の色<sup>しき</sup>は心<sup>こころ</sup>に非<sup>あらず</sup>ず、心<sup>こころ</sup>を離<sup>はな</sup>れて画色<sup>がしき</sup>無<sup>な</sup>く、画色<sup>がしき</sup>を離<sup>はな</sup>れて心<sup>しん</sup>無<sup>な</sup>し。

彼<sup>か</sup>の心<sup>しん</sup>は常<sup>じょうじゅう</sup>住<sup>む</sup>せ<sup>ず</sup>ぎ、無量<sup>むりょう</sup>にして思議<sup>しぎ</sup>し難<sup>がた</sup>く、一切<sup>いっさい</sup>の色<sup>しき</sup>を顕現<sup>けんげん</sup>して、各々<sup>おのおの</sup>相知<sup>あいし</sup>ら<sup>ず</sup>ず。

猶<sup>な</sup>お工<sup>たく</sup>みなる画師<sup>がし</sup>も、画心<sup>がしん</sup>を知<sup>し</sup>ること能<sup>あた</sup>わざるが如<sup>ごと</sup>し。当<sup>まさ</sup>に知<sup>し</sup>るべし、一切<sup>いっさい</sup>の法<sup>ほう</sup>は、その性<sup>しょう</sup>も亦<sup>また</sup>是<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>し。

心<sup>こころ</sup>は工<sup>たく</sup>みなる画師<sup>がし</sup>の如<sup>ごと</sup>く、種<sup>しゅじゅ</sup>種<sup>ごおん</sup>の五陰<sup>えが</sup>（注：色受想行識の五つ）を画<sup>えが</sup>き、一切<sup>いっさい</sup>世界<sup>せかい</sup>の中<sup>うち</sup>に、法<sup>ほう</sup>として造<sup>つく</sup>らざるもの無<sup>な</sup>し。

心<sup>しん</sup>の如<sup>ごと</sup>く仏<sup>ぶつ</sup>も亦<sup>また</sup>爾<sup>しか</sup>なり、仏<sup>ぶつ</sup>の如<sup>ごと</sup>く衆生<sup>しゅじょう</sup>も然<sup>しか</sup>なり。心<sup>しん</sup>と仏<sup>ぶつ</sup>と及<sup>およ</sup>び衆生<sup>しゅじょう</sup>とは、是<sup>こ</sup>の三<sup>みつ</sup>つは差別<sup>しゃべつ</sup>無<sup>な</sup>し。

諸<sup>しよぶつ</sup>仏<sup>ことごと</sup>は悉<sup>いっさい</sup>く、一切<sup>しん</sup>は心<sup>てん</sup>より転<sup>りょうち</sup>ず」と了知<sup>も</sup>したも<sup>よ</sup>う。若<sup>かく</sup>し能<sup>ごと</sup>く是<sup>ざと</sup>の如<sup>か</sup>く解<sup>ひと</sup>らば、彼<sup>しん</sup>の<sup>ほとけ</sup>人<sup>み</sup>は、真<sup>まこと</sup>の<sup>ほん</sup>仏<sup>を</sup>見<sup>み</sup>たてまつらん。

こころ またこ しん あら しん またこ こころ あら りょうしゃがっ いっさい ぶつじ な じざい  
心も亦是の身に非ず、身も亦是の心に非ずして、[両者合して]一切の仏事を作し、自在  
なること未曾有なり。

も ひと こと さんぜいっさい ほとけ し ほつ まさ かく ごと かん こころ もるもる  
若し人が求めて、三世一切の仏を知らんと欲せば、应当に是の如く観ずべし、心は諸  
の如来を造ると<sup>(1)</sup>。

中村元『華嚴経』『楞伽経』より（円括弧内は筆者注）

この古い詩文の中の「心」という言葉を、分別智レベルの意識場に限定するならば、その真意は理解し難いものとなる。しかしながら、この「心」を無分別智レベルの統合場にまで拡張するならば、この唯心の詩文は比較的理解しやすいものとなる。次に本書で提唱する統合場のモデルの立場から、この詩文が示すところの世界観を解説してみる。

私たちの心の中には、心のはたらきに応じて、感覚によって捉えられた世界（彩色）、あるいは論理によって捉えられた世界（地、水、火、風の四大）がつくられている。感覚的世界そのものは論理的世界ではなく、論理的世界そのものは感覚的世界ではない。しかしながら、論理的世界の本性・本質を離れて別に感覚的世界が存在しているわけではない。

心に生じるクオリア（彩画の色）そのものは心ではなく、心そのものはクオリアではない。しかしながら、心を離れてクオリアはなく、クオリアと離れた別なところに心が在るわけでもない。

この心は本来、時空上に有限なものとして限定されるものではなく、思考によって把握されるものでもない。「本来としての心」は一切事象を顕現しているが、その根本的にはたらきを分別智は推し量ることができない。本来の心は、種々の五蘊（精神的事象と物理的事象）を展開しており、一切事象の中でそれを離れて在るものは無い。この無分別智のレベルの心は、衆生でもあり、仏でもある。心と衆生と仏の三つに根本的区別は無い。

仏教は無分別智レベルの心を、仏性、法身、真如などと様々な名前と呼ぶが、それは一切事象の本性・本質でありながら、縁起する一切事象のありのままである。それは単なる形而上学的な概念や思想ではなく、直接体験によって体得される生の根本的事実である。それは私たちの「命そのもの」であり、主体と分離区別された何らかの実体や概念などではない。華嚴経はそれを心と呼び、すべてはただ一心のつくり出したものであると明言する。

## 第二章二節 現成公案

道元禪師の「正法眼蔵」は日本の曹洞宗の聖典であり、日本の仏教思想、哲学を代表する書物である。正法眼蔵の内容は道元禪師の正覚体験が基礎となっており、私たち凡夫がその内容を理解することは非常に難しいのであるが、本書で示す統合場のモデルは、その真意を理解する一助になってくれるかと思う。

次に正法眼蔵から二つの詩文を引用する。最初の引用文は「第一 現成公案」、二つ目は「第九 古仏心」からの抜粋である（現代語訳は元曹洞宗宗教学部長の中村宗一師によるものである）。

譬えたとば船に乗って、海に出て四方を眺めるとき、海は円く見えるばかりで、そのほかのかたちは見えない。しかし、海は円いものでもなく四角いものでもなく、そのほかに様々の姿かたちがある。海は魚が見れば宮殿であり、天人が見れば宝玉づくめの玉飾りである。それがわれわれの目に円く見えるに過ぎないのである。

総てのものごとがそうである。常識の立場にも、仏道の立場にも様々な立場があるが、人はただ、置かれた立場や経験、あるいは自分の能力の範囲内でしか、それを知ることができない。

ものごとの真実を知るためには、海山が円いとか四角いとか見えるほかに、世俗界にも仏法界中にもそのほかの姿かたちが極まりなく、無限の世界があることを知るべきである。

自分の周りがそうであるばかりでなく、自分自身のうちにも、無限の世界があることを知るべきである。

魚が水を行くとき水には限りがなく、鳥が空を飛ぶとき空には限りがない。しかし魚や鳥は昔から水や空を離れず、広く行く必要があれば広く行き、狭く行く必要があれば狭く行く。

そのようにして、それぞれの道を尽くしているとはいえ、鳥が空を離ればたちまち死に、魚が水を離ればたちまち死ぬ。魚が水を命とし、鳥が空を命としていることを人は知っている。そのうえは鳥の無いところには空は無く、魚の無いところには海は無いことを知りなさい。命いのちは鳥において実現し、魚において実現するのである。このことを体験すべきである。

修行のうちに悟りがあり、それによって長短を超えた命が実現されるということは、このようなことである<sup>(2)</sup>。

道元禪師「正法眼蔵第一 現成公案」より

古仏心というは新古を超越した古心、即ち衆生の仏心、即ち平等心である。古の意は悠久・久遠であり絶対である。古心はこの絶対の意であるから、古心は体験である。心そのものである仏は必ず古のものであるとともに現存している。古の心は椅子であり、竹であ

り木であり、言葉によって求めることのできないものであり、言葉によって名づけることのできないものである。現在の因縁、および一切の虚空は、ともに古仏心にほかならないのである。いまの因縁時節を自己のものとし、古仏心を自己のものとするのが、同時にそのいずれをも自己のものとするのであり、そのいずれをも解脱することである<sup>(3)</sup>。

道元禪師「正法眼蔵第九 古仏心」より

道元禪師が表現する「古仏心」あるいは「姿かたちの極まりのない無限の世界」とは、本書の「統合場」に相当するかと思う。私たちはただ、おかれた立場や経験、あるいは自分の能力の範囲内でしか、それを知ることができない。古仏心は椅子であり、竹であり、木であり、それは本来、言葉によって名づけることのできないものである。

魚は限りの無い水を命とし、鳥は限りの無い空を命とする。命は魚において実現し、鳥において実現する。無数の意識場は限りの無い統合場を命とし、その命は意識場において実現する。覚りとはそれを直接体験によって知る智慧である。

---

1 中村元『『華嚴経』『楞伽経』』東京書籍（2003）五八～五九頁  
2 道元「正法眼蔵」中村宗一（訳）、誠信書房（1971）五～六頁  
3 同上 一五三～一五四頁